

透析導入者の透析装置受入れにおける看護のかかわり

Psychological intervention in nursing care for hemodialysis patients.

人工腎臓部：○草深 仁子・滝沢 武子

医療短大： 小松万喜子

1. はじめに

透析者は長期透析による合併症予防のため食事制限や日常生活において自己管理が大切である。この自己管理という点では食事制限や日常生活だけでなく、透析装置などにも関心を持ち、スタッフにおまかせというのではなく、自分の検査データと併せて管理してほしいと考えている。

今回私は、透析導入者の透析装置受入れ状況と自己管理という点で、装置に対する関心の現状について調査し、私たちが透析導入者に対してどのような援助をしたら良いのか検討した。

2. 方法

対象は平成5年1月より8年4月までに当院で血液透析導入を行った29名のうち死亡・入院中・聴力障害者の5名を除いた男性15名女性9名、合計24名、平均年齢 58.7 ± 24.7 才。

方法は電話による聞き取り調査を行い、導入期の透析装置に対する印象や抵抗感の有無、透析導入の必要性を感じていたか否か、どのようなことで慣れることができたかなどについて、回答してもらった。(表1)

表1. 方法

〈対象〉平成5年1月より8年4月までに当院で血液透析を導入した29名のうち死亡、入院中、聴力障害者の5名を除いた24名。 男性：15名 女性：9名 平均年齢： 58.7 ± 24.7 才
〈方法〉電話による聞き取り調査
〈調査項目〉
1. 導入前に透析装置を見たことがあるか
2. 導入時の透析装置の印象
3. 透析導入に対する受容の有無
4. 透析装置に慣れるまでの期間
5. 透析装置に慣れたきっかけ
6. 現在除水量や透析装置などの確認をしているか

3. 結果・考察

1. 導入前に透析装置を見たことの有無について、有りが7名なしが17名であった。

当院では導入時の見学をしているので、もう少し多くの患者が透析装置を見たことがあると予想したが少なめだった。(表2)

表2 透析導入前に透析装置を見たことがありますか (n = 24)

見たことがある 7 (29.1%)	見たことがない 17 (70.9%)
----------------------	-----------------------

透析導入時の透析装置の印象は抵抗なく装置が見れた14名, 怖くて装置が見れなかったが9名, このほか覚えていないが1名だった。比較的抵抗なく装置を見ることができている。以前に装置を見たことがある者が抵抗感がないかと調べてみたが, 両者の間に有意な関係はみられなかった。導入前の見学では透析室の雰囲気を知り不安を軽減することにはなるが, 透析装置について抵抗感を軽減することには有効ではないと思われる。(表3)

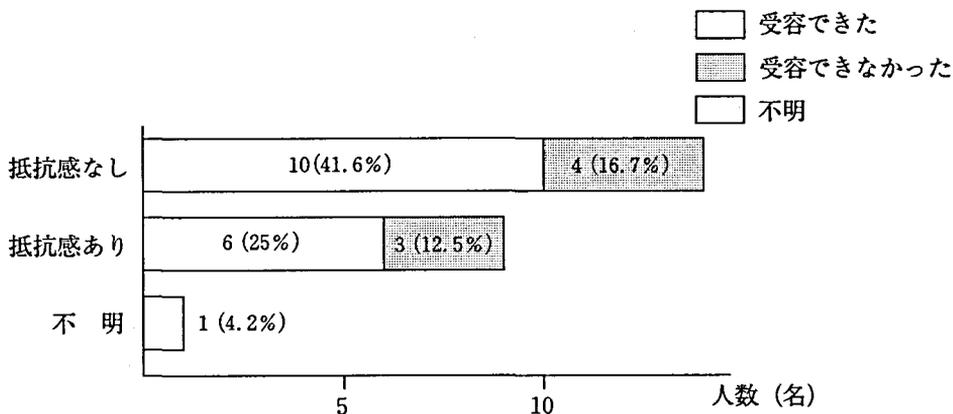
表3 初めて透析を行ったときの透析装置に対する印象 (n = 24)

抵抗なく見れた 14 (58.3%)	こわくて装置が見れなかった 9 (37.5%)	
		↓ その他 1 (4.2%)

2. 透析を受容できていた有無と透析装置に対する抵抗感について図3に示した。抵抗感なしの14名のうち透析を受容できていた者10名, 抵抗感有りの9名のうち透析を受容できていた者6名だった。全体をみると透析装置に対する抵抗感がない者の方が多かった。(表4)

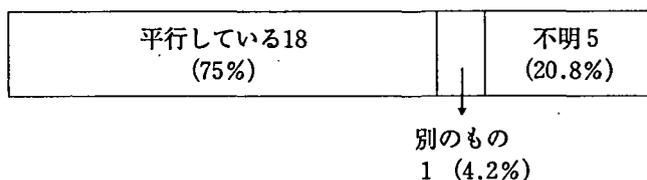
透析の受容ができていた方が装置に対する抵抗感がないと予想したが, 有意な差はみられなかった。

表4. 透析を受容できた有無と透析装置に抵抗感を感じたか否か (n=24)



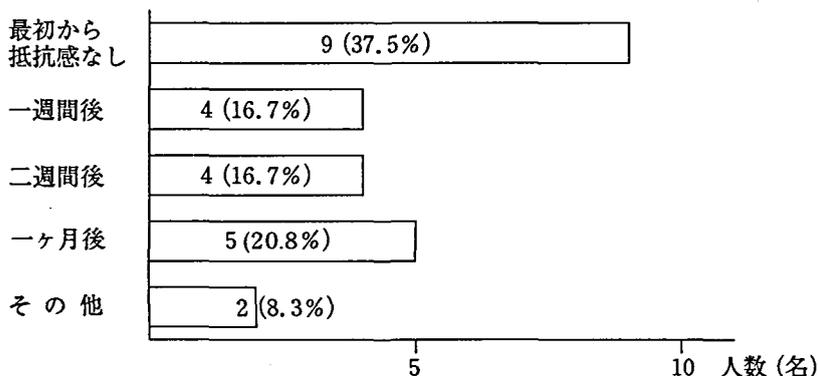
3. 透析装置に慣れることと, 透析に慣れることは平行しているかについて, 平行していると考えている者が約18名・75%, 不明が5名・21%, 別のものと考えている者は1名のみだった。私達は患者に対し透析に慣れてもらえるような援助をすることで, 透析装置にも慣れてもらえると思われる。(表5)

表5 透析装置に慣れることと透析に慣れることは平行しているものか (n = 24)



4. 透析装置に抵抗感が無くなり慣れたと感じるまでの期間を表6に示した。最初から抵抗なしが9名37.5%，一週間後二週間後がそれぞれ4名16.7%，一ヶ月後が5名20.8%であり，ほとんどの患者が一ヶ月間位で慣れたようだがバラツキが大きかった。これは症状の安定も少なからず影響していると考えられる。病状が安定した時期といえる¹⁾約1ヵ月以降に，患者個々に合わせ透析に慣れてきたと思われたら装置に対する説明を始めていくような配慮が必要と思われる。

表6 透析装置に抵抗感がなくなり慣れたと感じるまでの期間 (n=24)



5. 実際患者がどのようにして慣れたか，きっかけについて表7に示した。何度か透析をしているうちに慣れた7名。仲間の元気な姿を見たり話を聞いた5名等の他，心配してくれるスタッフの言葉がけや元気な仲間から聞く情報で自分も元気がでて気にならなくなった。などの声が聞かれ少しずつ変容している様子がうかがえた。私たち看護婦はこまめに声をかける他，患者どうしコミュニケーションがとりやすくなるよう配慮していく必要があると思われる。

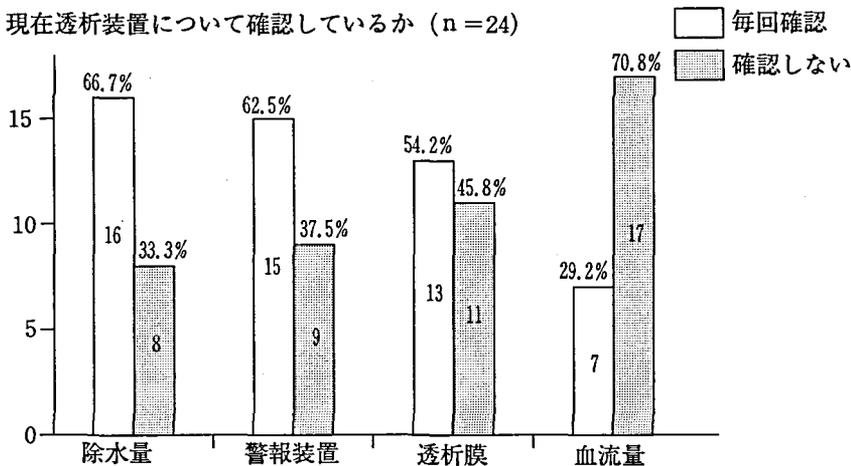
表7 透析装置にどのようにして慣れたか (複数回答あり)

何度か透析しているうちに慣れた	7名
仲間の元気な姿を見たり話を聞いた	5名
医師が色々と心配してくれた	4名
スタッフがそばにいて声をかけてくれた	3名
全腎協の雑誌や本を読んだ	2名
「どうにでもなれ」と開き直った	1名
透析も点滴と同じと思った	1名

6. 現在装置の確認をどの程度行っているのかについて表8に示した。除水量の確認をしているのが16名66.6%で比較的多いかと思えるのみで、全体的には確認している者が少ない印象だった。²⁾小川らによると「ダイアライザーに関心をもっているか調べてみると全体の51%が関心を持っている」とあるがね今回の当院の調査とはほぼ同様な結果だった。それぞれの項目の確認の有無について、男女には有意さはなかった。年代を60才以上と未満に別けてみると除水量を確認するかどうかにおいて5%水準で有意さがあつたが、他の項目においては差はみられなかった。装置の確認の有無は男女差や年齢差にはあまり関係なく、個人差が大きいと思われた。小川らは「ダイアライザーに関心のある患者は検査データにも注意しており、自己管理への認識度が高い印象がある」と述べている。私達は透析導入者が透析装置に慣れてからは、検査データと併せて透析装置やダイアライザー・除水量などについても関心をもち自己管理してほしいと考えている。私達は透析導入者の年齢や性別に関係なく個々に応じて指導することや透析当日のバイタルサインにすぐに反映する除水量だけでなくダイアライザーの面積・種類や血液量などについても関心が持てるよう検査データと合わせ話すことが大切だと思われる。

また血液量やダイアライザーについては、見てもわからないからという理由の他、透析装置の画面やダイアライザーが見えないので確認できないという声も聞かれた。患者が自分で画面を確認できるよう、透析装置の向きを変えたりして工夫することも必要と考える。

表8. 現在透析装置について確認しているか (n=24)



4. 結論

私達が透析導入者に対して次のような援助が大切と考える。

1. 導入後1ヵ月間位は透析に慣れることを目標におきリラックスできるようにする。
2. 透析装置に慣れるために看護婦はこまめに声をかけたり、仲間でコミュニケーションが取りやすくなるよう配慮していく。
3. 患者が機器の役割や重要性を理解でき関心が向けられるよう検査データと併せて繰り返し説明をする。
4. 患者が装置を含めて透析治療に対して主体的に自己管理していけるように患者と一緒に考えていく姿勢をもつ。

5. おわりに

透析者は透析なしには生命を維持することはできない。透析装置につながれて生活するのではなく、もっと主体的に自分の透析生活の中に取り入れていく橋渡しをしていくことも私達看護婦の大事な仕事だと考える。

引用文献

- 1) 平沢 由平：透析療法マニュアル，第4版，日本メディカルセンター，1994，P61.

参考文献

- 1) 赤間立枝：透析患者の精神医学と心理療法，日本メディカルセンター，1989.
- 2) 春木繁一：透析，腎移植の精神医学，中外医学社，1990.